

千葉大学医学部歯科口腔外科並びに日本大学歯学部口腔外科の創設者 入戸野賢二先生とその著書について ～佐藤運雄先生他主な関係者と著書「口腔外科学」について

Kenji Nittono, Founder of Chiba University School of Medicine Department of Oral Surgery,
Nihon University School of Dentistry Department of Oral Surgery and his work
—Kazuo Sato Other Main Persons Concerned and 「Oral Surgery」

工藤逸郎*¹ 三宅正彦*¹ 見崎 徹*¹ 金山利吉*¹ 西山 實*¹
若松佳子*¹ 小室歳信*¹ 佐藤 孜*¹ 丹沢秀樹*²

要旨：千葉大学医学部歯科口腔外科並びに日本大学歯学部口腔外科の創設者 入戸野賢二先生の略歴，特に日本大学歯学部の創設者 佐藤運雄先生との関係，入戸野・佐藤共著の「口腔外科学」更に入戸野単著の「口腔外科学」の内容について述べ，若干の考察を加えた。

Key Words：入戸野賢二 Kenji Nittono, 佐藤運雄 Kazuo Sato, 口腔外科学 Oral Surgery, 千葉大学医学部歯科口腔外科 Chiba University School of Medicine Department of Oral Surgery, 日本大学歯学部口腔外科 Nihon University School of Dentistry Department of Oral Surgery

1. はじめに

入戸野賢二先生は現在の千葉大学医学部歯科口腔外科の創設者であり，また日本大学歯学部口腔外科の創設者とされている。

今回，主として入戸野賢二先生の生涯と千葉大学医学部歯科口腔外科，日本大学歯学部口腔外科の両教室，特に佐藤運雄先生その他関係者との関係，著書「口腔外科学」の変遷について報告する。

2. 入戸野賢二先生の略歴

入戸野先生に関する資料はきわめて少なく，生年月日も明らかではない^{1)～9)}。

昭和2年(1927)5月に脊椎部腫瘍のため44歳で早逝されており¹⁾，それから逆算すると明治16

年(1883)生まれとなる。

佐藤運雄は明治12年(1879)11月18日生まれのため4歳違いで佐藤が年長である⁵⁾(図1)。

入戸野は明治42年(1909)26歳で京都帝国大学福岡医科大学(現九州大学医学部)を卒業している。直ちに同大学副手を経て東京帝国大学医科大学歯科学教室副手，助手を経て大正元年(1912)10月29歳で県立千葉病院第2外科部長に就任し，同時に千葉医学専門学校の外科学の授業を担当したとされている¹⁾。

京都帝国大学医科大学の副手期間，東京帝国大学の副手，助手の期間は明らかではないが，大学を卒業し，県立千葉病院第2外科部長に就任する迄の期間は3年弱であることから，京都帝国大学医科大学の副手期間は明治42年から明治43年に亘る約1年間，東京帝国大学医科大学の副手，助手の期間は明治43年から大正元年迄の約2年の期間であると思われる。

その後入戸野は医術開業試験委員，歯科医師試験委員に任ぜられ，大正7年(1918)千葉医学専門学校外科学教授に昇任した。これと共に第2外

*¹ Itsuro Kudo, Masahiko Miyake, Toru Misaki, Toshiyoshi Kanayama, Minoru Nishiyama, Yoshiko Wakamatsu, Toshinobu Komuro and Tsutomu Sato, Nihon University School of Dentistry, 日本大学歯学部

*² Hideki Tanzawa, Chiba University School of Medicine, 千葉大学歯学部

佐藤 運雄・入戸野 賢二 略歴

年 号	佐藤 運雄	年 齢	入戸野 賢二	年 齢
明 12(1879)	11月18日 誕生			
明 16(1883)		4	誕生	
明 36(1903)	7月 シカゴ大学ラッシュ医科大学卒業(M.D) 10月 帰国 11月 東京歯科医学院 講師 東京帝国大学医科大学歯科学教室入室	24		20
明 38(1905)	5月 東京帝国大学医科大学歯科学 講師	26		22
明 40(1907)	東京歯科医学専門学校 教授	28		24
明 41(1908)	5月 東京帝国大学 東京歯科医学専門学校 退職 南満州大連鉄道病院歯科部長 南満医学堂 教授	29		25
明 42(1909)		30	京都帝国大学福岡医科大学(九大医)卒業 同大学 副手 東京帝国大学医科大学歯科学教室 副手、助手	26
明 43(1910)	帰国	31		27
明 44(1911)	6月 文部省 歯科医術開業試験委員	32		28
明 45(1912)		33	10月 県立千葉病院第二外科部長 千葉医学専門学校 講師 文部省 歯科医術開業試験委員	29
大 2(1913)	養父 佐藤 重氏 逝去のため歯科医院を継ぐ 診療所で臨床試験会を開設	34		30
大 5(1916)	4月 歯科医術開業試験委員 辞職 4月15日 東洋歯科医学校 開設	37		33
大 7(1918)		39	千葉医学専門学校 教授(外科学) 第二外科部に歯科診療施設設置 (歯 口 科 設 置) 10月 海外留学	35
大 9(1920)	4月1日 東洋歯科医学専門学校 認可	41		37
大 10(1921)		42	3月 帰国 東京帝国大学医学部 講師 併任 学 位 取 得	38
大 11(1922)	6月30日 日本大学専門部歯科 創設	43	千葉県立千葉病院が 正式に医学専門学校附属 病院に移管、日本大学専門部歯科非常勤教授	39
大 12(1923)		44	千葉医学専門学校、千葉医科大学に昇格 講師に格下げ	40
大 14(1925)	11月17日 関東大震災後の新校舎 竣工 (口腔外科 創設)	46	7月、千葉医科大学退職、丸ビルに開業 日本大学専門部歯科非常勤教授(口腔外科主任)	42
昭 2(1927)		48	5月 脊椎部腫瘍のため逝去	44

図 1 佐藤運雄・入戸野賢二 略歴

科部に歯科診療施設が併置された。これが千葉大学医学部歯科口腔外科の創設の年で、本年で87年を迎えることになる¹⁻⁷⁾。

入戸野の医術開業試験委員の期間は明らかではないが、恐らく明治45年(1912)あるいは大正元年(1913)から外国留学に出発する迄の大正7年(1918)7月迄の約6年弱の期間と思われる。

入戸野は大正7年(1918)8月千葉県および文部省から口腔外科学研究のため海外留学を命ぜられ、米国ペンシルバニア大学で歯科学研究、次いでスイス、フランス、スエーデン、デンマーク、

ドイツをめぐって大正10年(1921)3月に帰国した。留学期間は2年7か月に亘っている。入戸野外遊中は荒井千代之助が代理を務めた。入戸野の外遊は九州大学間田亮次教授と行をとにした。これが欧米の口腔外科学をわが国に紹介導入した嚆矢であり、共にわが国口腔外科の開祖であるとされている¹⁾。

入戸野は帰学の大正10年(1921)東京帝国大学医科大学(歯科学教室)講師を兼任して口腔外科学を指導し、更に「神経単位の成長に就いて」の研究で医学博士の学位を得た¹⁾。

著書「口腔外科学」の変遷

- ◆ 大正9年(1920)4月28日
近世歯科全書、第七巻
「口腔外科学」初版発行
入戸野賢二、佐藤運雄 共著
東洋歯科医学専門学校出版部
- ◆ 大正10年(1921)5月15日 再版発行
- ◆ 大正12年(1923)4月30日 三版発行
近世歯科全書、第七巻
「口腔外科学」
入戸野 賢二 著
東洋歯科月報社
- ◆ 大正13年(1924)9月1日 五版発行
- ◆ 昭和7年(1932)11月25日 発行
「口腔外科学」
佐藤 運雄 著
歯科月報社

図2 著書「口腔外科学」の変遷

入戸野の海外留学中の大正9年(1920)4月には入戸野、佐藤共著の「口腔外科学」初版が発刊され、大正10年(1921)5月に再版が発刊されている¹⁰⁾(図2)。

本書は大正12年(1923)4月に入戸野の単著として三版が発刊され、更に大正13年(1924)5月に五版が発刊されている¹¹⁾。

大正11年(1922)4月千葉県立千葉病院が正式に千葉医学専門学校に移管された。更に大正12年(1923)3月には千葉医科大学に昇格した。一方佐藤が大正5年(1916)に設立した東洋歯科医学学校は大正9年(1920)東洋歯科医学専門学校に昇格し、更に大正11年(1922)6月日本大学に合併し、日本大学専門部歯科となり^{5,6~23)}、入戸野は日本大学専門部歯科非常勤教授に就任した¹⁵⁾。しかし口腔外科学の教授としての記録は残されていない(図3)。

大正12年(1923)3月千葉医学専門学校は千葉医科大学に昇格した。しかし大学昇格には制度として単科大学には歯科の講座を置かないということであったため、歯科は病院の一部に診療科的な存在となった。これに伴って千葉医学専門学校教授であった入戸野は千葉医科大学講師に格下げとなり、東京帝国大学医科大学(歯科学教室)講師も兼務することとなった¹⁾。

当時官立大学医学部で歯科学教室のあったのは

入戸野 賢二先生の略歴 (資料実在のもの)

(日本大学専門部歯科)

- ◆ 大正11年(1922)7月
東洋歯科医学専門学校から日本大学専門部歯科
10月 付属医院 完成
・スπιットン付 診療椅子 30台、受付、予診室、
薬局等も完備
・当時の委員スタッフ
院長:佐藤 運雄、副院長:川合 渉
・教授名簿中に入戸野 賢二の名あり
- ◆ 大正13年(1924)
9月28日 専門部歯科第一回卒業式(12名)
来賓中に入戸野 賢二の名あり
- ◆ 大正14年(1925)11月21日
関東大震災後の新校舎、病院落成
(4階建、11.48 m²、延べ45.68m²)
医院は 1・2 階
【1F】受付、待合室、外科、保存科、陶材料、矯正小児歯科、
X線科、薬局、材料科、外科室(タイル張り)、(治療椅子3台)
【2F】補綴科、技工室
・治療椅子 スπιットン付コロンビア型鉄骨椅子100余台
・病床3(大正15年5月以降、入院患者は隣接の医科病院に
収容し、歯科医員が診療)
・歯科病院スタッフ
院長:佐藤運雄、副院長:川合 渉、宮永登起雄
口腔外科主任:入戸野 賢二
歯科外科主任:佐藤 伊吉
・歯科校舎、病院の落成式典
大正14年(1925)11月21日挙行。21・22・23の3日間
講演会、口腔衛生資料展示会、音楽会等を開催
専門部歯科講演会での口腔外科関係の演題
● 子供の齲歯の予防法 :教授 入戸野 賢二
● 智歯難渋したらX写真を撮れ:教授 佐藤 伊吉

図3 入戸野賢二先生の略歴

東京帝国大学と九州帝国大学のみで官立の医科の単科大学で歯科診療施設のあったのは千葉医科大学と名古屋医科大学のみであり、名古屋医科大学の歯科も千葉医科大学の歯科と同一の運命を辿った。これはわが国の口腔外科の発展に大きなマイナスであったとされている¹⁾。

入戸野は口腔外科手術のため千葉と東京を交互に出勤したため、千葉医科大学における手術の助手、入院患者の後処置等のため外科の医局員1名を歯科口腔外科に兼務させる必要が生じ、湯浅為司郎、次いで佐藤伊吉が兼務した。佐藤伊吉は大正12年(1923)千葉医学専門学校出身で後の千葉大学医学部歯科口腔外科講座の初代教授である¹⁾。

入戸野はまたわが国で齒槽膿漏の外科手術であるノイマン、ウイドマン氏法を行った最初であるとされ、両大学で活躍していたが、大正14年(1925)7月に至り42歳で千葉医科大学を退職し丸ビルに開業した^{1~4)}。更に日本大学専門部歯科において口腔外科主任として引き続き非常勤教授を務めた¹⁵⁾。

一方、大正11年(1922)6月に東洋歯科医学専門学校から日本大学に合併した日本大学専門部歯科は徐々に発展をとげていたが、大正12年(1923)9月1日の関東大震災によって校舎の全施設を失う結果となり、急造のバラック校舎、仮校舎等で授業を行っていた¹⁵⁾。

大正13年(1924)8月19日には日本大学専門部歯科に歯科医師法の指定により待望の卒業生に対する歯科医師の免許に伴う無試験開業の特典が与えられた。同年9月28日に指定第一回日本大学専門部歯科の12名の卒業式が挙行され、入戸野も来賓として参加している^{15,18,21~22)}。

佐藤は失った校舎の建築を大正13年(1924)秋以来、本建築工事に着手して大正14年(1925)11月に竣工した。校舎の他、病院として外科室、病室等が完備し、口腔外科主任として初めて入戸野賢二の氏名が記載されている¹⁵⁾。

歯科校舎、病院の落成式典は11月21日、22日、23日に式典の他、祝賀行事が開催された。

口腔外科の創設はこの様に大正14年(1925)11

月21日、主任教授入戸野賢二とするのが最も妥当と思われる。大正14年以來日大歯学部口腔外科は本年で創設80年を迎えることになる。

この様に口腔外科の創設に努力した入戸野は昭和2年(1927)5月脊椎腫瘍のため44歳で逝去された¹⁾。千葉大学医学部口腔外科、日本大学歯学部口腔外科、日本の口腔外科、歯科界にとって誠に惜しまれる早逝であった。

日本大学専門部歯科における非常勤教授としての期間は僅か5年弱であった。

3. 入戸野賢二先生と日本大学専門部歯科長 佐藤運雄先生との交流の経緯について

入戸野と佐藤の出合いは佐藤が満洲から帰国した明治43年(1910)6月以降と思われる。

これは入戸野が明治42年(1909)26歳で京都帝国大学福岡医科大学を卒業し、同大副手を経て東京帝国大学医科大学(歯科学教室)副手、助手として勤務したのが¹⁾、恐らく明治43年(1910)頃と推察されるからである。

恐らく入戸野と佐藤の出合いはお互いの恩師である東京帝国大学医科大学歯科学教室の初代主任石原久助教授(大正4年教授に就任)の歯科学教室の同門としての交流が端緒になったものと思われる(図4)。

東京帝国大学医科大学の外科助手石原久氏は卒業5年目に海外留学を条件に歯科学教室の主任と

佐藤 運雄・入戸野 賢二 両先生の交流関係

年 号	共通項目	佐藤 運雄	入戸野 賢二	共通期間
・ 明36(1903) ～明41(1908)	東京帝国大学 医科大学 歯科学教室	11月入室 5月退職	副手・助手として入室 9月退職 → 約3年	なし 同門会々員
・ 明42(1909) 又は明43(1910) ～大元(1912)		4年6ヵ月		
・ 明44(1911)6月 ・ 大元(1912) ・ 大5(1916) ・ 大7(1918)	文部省 歯科医術 開業試験委員	委員 就任 4月 退任(約5年弱)	委員 就任(6年弱) 8月～ 大10年(1921)3月 外遊(2年7ヵ月)	4年弱
・ 大11(1922) ・ 昭2(1927)	日本大学 専門部歯科	7月 日本大学専門部 歯科長	7月 非常勤教授 5月 逝去	5年弱

図 4 佐藤運雄・入戸野賢二両先生の交流関係

なることを口説き落され、明治 32 年 (1899) ドイツに留学し、その帰途の途中、明治 35 年 (1902) 2 月米国に立ち寄って、各地の歯科大学を視察した。その際シカゴ大学ラッシュ医科大学に留学していた佐藤と接触し、それが佐藤と石原との交流の端緒となり、佐藤が帰国後の明治 36 年 (1903) 11 月帰国後に東京帝国大学医科大学歯科学教室に入局し、明治 37 年 (1904) に講師に昇格し、渡満する明治 41 年 (1908) 5 月迄の約 4 年 7 か月在任した¹⁷⁾。

佐藤は石原久助教授の同級生南満洲鉄道病院々長の河西健次氏の推薦により明治 41 年 (1907) 5 月、東京帝国大学医科大学講師、東京歯科医学専門学校教授を退職して、南満洲鉄道大連病院歯科口腔外科医長、南満医学堂教授として渡満し、活躍していたが、健康を害して明治 43 年 (1910) 6 月に帰国した^{12~16,18,21~23)}。

佐藤は明治 44 年 (1911) 6 月には文部省医術開業試験委員、歯科医師試験に任じられ、大正 5 年 (1916) 4 月まで就任していたが、同年 4 月 15 日東洋歯科医学校を創設し、校長となったため辞任している¹⁵⁾。委員の期間は約 4 年 10 か月であった。

入戸野は明治 45 年 (1912) 文部省医術開業試験委員、歯科医師試験委員に就任し、海外留学の出発の大正 7 年 (1918) 10 月前に辞任しているものと思われ¹⁾、委員の期間 7 年弱のうち明治 45 年 (1912) から佐藤が東洋歯科医学校を創設したため委員を辞任して大正 5 年 (1916) 4 月迄の 4 年弱は両者は委員として共通の期間があったものと思われる。この様に両者は東京帝国大学医科大学歯科学教室の同門としての他、文部省医術開業試験委員として更に親交が深まったものと思われる。

佐藤伊吉は入戸野先生は佐藤運雄先生と親密な関係で日本大学専門部歯科発展のため協力されたと述べている¹⁾。

この様に両者は明治 43 年 (1910) 6 月以降親交が深まったとすると入戸野は昭和 2 年 (1927) 5 月脊椎部腫瘍のため 44 歳で逝去されているので両者の交流期間は約 17 年間であった¹⁾。

大正 5 年 (1916) 4 月 15 日に東洋歯科医学校を創設した佐藤は各科目の教科書、参考書の発刊を企画し、大正 6 年 (1917) 1 月に近世歯科全書の刊行を目指し、その第 7 巻に入戸野、佐藤による「口腔外科学」(刊行予定には歯科外科学)が企画され

ている^{10,11)}。

入戸野の海外留学中の大正 9 年 (1920) 4 月には入戸野、佐藤共著の「口腔外科学」の初版が刊行されているが、恐らく佐藤は入戸野単著による発刊を企画していたが、海外留学のため止むを得ず、共著としたことが記載されている¹⁰⁾。本書は大正 10 年 (1921) 5 月に再版が発刊され、入戸野帰国後の大正 12 年 (1923) 4 月発刊の三版以降は入戸野の単著であり、大正 13 年 (1924) 9 月には五版が発刊されている^{10,11)}。

佐藤は大正 5 年 (1916) 東洋歯科医学校を創設し、大正 9 年 (1920) 東洋歯科医学専門学校に昇格させ、更に大正 11 年 (1922) 7 月東洋歯科医学専門学校を日本大学に合併し、日本大学専門部歯科として学校の発展に努力した。大正 11 年 (1922) 10 月には新しい付属医院が完成し、スピットン付診療椅子も 30 台を越えるに至った。同年 6 月佐藤は入戸野を日本大学専門部歯科非常勤教授に依頼し歯科病院スタッフの中に院長佐藤運雄、副院長川合渉等に加えて教授名簿中に入戸野賢二の氏名が記載されている¹⁵⁾。

大正 12 年 (1923) 9 月 1 日の関東大震災で日本大学専門部歯科の校舎、医院は消失し、バラック、仮校舎等で授業を行っていたが、新校舎、病院は大正 14 年 (1925) 11 月 21 日に完成した。医院は 1, 2 階でその中にタイル張り治療椅子 3 台の外科室も完備し、3 床の病室も整備された。そのため歯科病院スタッフとして院長佐藤運雄の他、口腔外科主任として入戸野、歯科外科主任として佐藤伊吉の氏名が記載されている。この様に大正 14 年 (1925) 11 月以降入戸野は口腔外科主任教授として佐藤に協力した^{1,15)}。

入戸野は大正 14 年 (1925) 7 月千葉医科大学を退職し、丸ビルに開業しているにも拘らず佐藤は入戸野を口腔外科の主任教授として迎えたことは入戸野に対する佐藤の信頼がいかに厚かったかを示すものであろう。

入戸野は昭和 2 年 (1927) 5 月 44 歳で逝去されたので、日本大学専門部歯科非常勤教授としての期間は僅か 5 年弱で口腔外科主任教授としての期間は僅か 1 年 10 か月弱であったが、佐藤に協力し、日本大学専門部歯科特に口腔外科の発展に盡力された。

入戸野単著の「口腔外科学」は五版以降、何回

の版を重ねたかは明らかではなかったが入戸野逝去5年後の昭和7年(1932)11月には佐藤運雄単著の「口腔外科学」が発刊されている^{24,25)}。

大正14年(1925)11月に日本大学専門部歯科に口腔外科が創設されて以来、本年で記念すべき80年を迎えることになる。

入戸野先生を開祖とする両教室はお互いの入事
の交流は勿論、昭和55年(1980)に発足した千葉

医学会歯科口腔外科例会第1回例会から本年度
25回を迎えて大きな交流の場となっている。

4. 著書「口腔外科学」の変遷について

1) 入戸野、佐藤共著「口腔外科学」について

入戸野、佐藤共著「口腔外科学」は大正9年(1920)4月28日に初版が発行され、大正10年(1921)5月15日に再版が発行されている。

今回、資料として用いたのは再版書である。

本書は大正12年(1923)4月30日に入戸野の単著として三版が発刊され、更に大正13年(1924)9月5日に五版が発刊されている。入戸野単著の「口腔外科学」の資料は五版を使用した。

再版書は横14.8 cm、縦21.8 cm、厚さ2.0 cm、目次5頁、本文428頁、図193図、索引5頁の青黒色厚紙カバーの著書である(図5)。

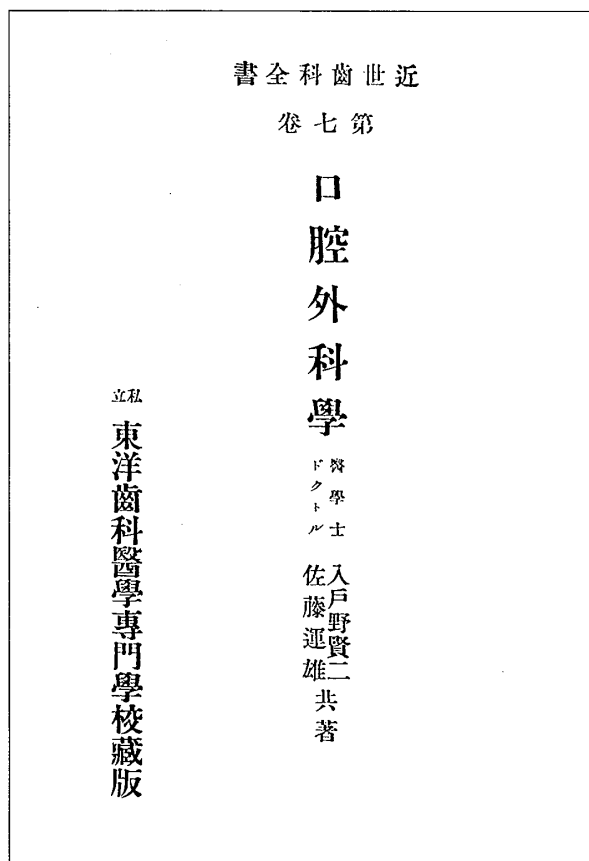


図5 「口腔外科学」

本書ハ全部約十一巻ヨリナリ歯科醫學ノ凡テノ課目ヲ網羅ス
課目及執筆者左ノ如シ

第十一卷	齒科組織學	東齒醫學士 横地秀雄
第十卷	齒科解剖學	東齒醫學士 佐藤運雄
第九卷	齒科生理學	醫學士 伊東準治
第八卷	齒科藥物學	醫學士 降島積治
第七卷	齒科病理學	醫學士 佐藤運雄
第六卷	齒科治療學	醫學士 佐藤運雄
第五卷	齒科矯正學	醫學士 佐藤運雄
第四卷	齒科矯正學	醫學士 佐藤運雄
第三卷	齒科矯正學	醫學士 佐藤運雄
第二卷	齒科矯正學	醫學士 佐藤運雄
第一卷	齒科矯正學	醫學士 佐藤運雄

図7 「口腔外科学」課目及び執筆者

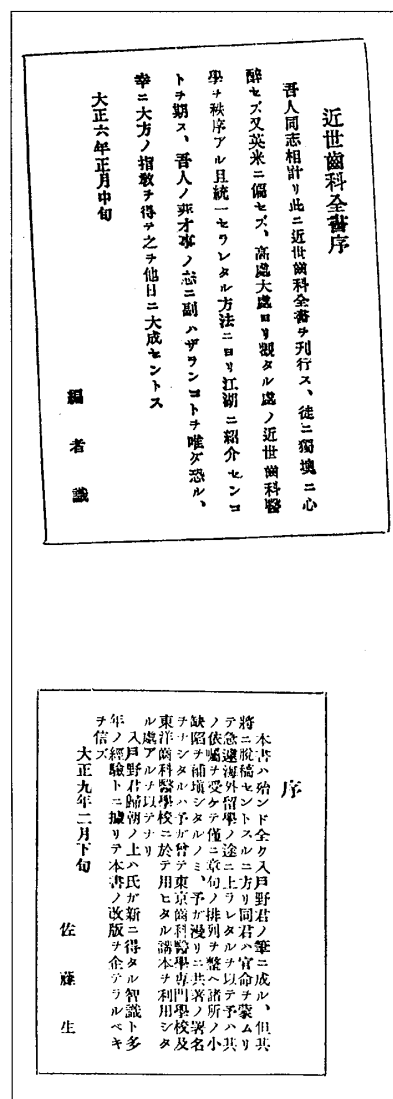


図6 「近世歯科全書序」(上)と「序」(下)

まず口腔外科学の裏表紙、次に近世歯科学全書序、序、更に近世歯科全書第11巻のタイトル、著者名が記載されて口腔外科学目次に続いている(図6, 7)。

口腔外科学目次

- 第一章 口腔成形異常論
- 第二章 口腔外傷論
- 第三章 口腔炎症論
- 第四章 口腔肉芽性炎症論
- 第五章 口腔腫瘍論
- 第六章 口腔神経症論
- 第七章 歯科外科手術論

以上の七章から成立している。

第一章の前文として口腔外科学の定義等が記載されている。

第一章 口腔成形異常論

1 頁から 92 頁迄記載されている。

一、顔面破裂形成、二、兔唇手術、三、胎生期破裂及裂溝部における異常、四、口蓋破裂、五、口蓋破裂手術、六、口蓋補綴術、七、顎骨畸形。以上の七小項目から成立している。

一 顔面破裂形成

破裂形成の諸説、原因、破裂の形態、予後に概略を述べ、(一)上唇正中破裂、(二)上唇側方破裂、(三)鼻破裂、(四)斜走顔面破裂、(五)横走顔面破裂、(六)下唇及下顎の正中破裂、について模式図、症例(外国文献)を記載し、予後についても述べている。

(第1図～第10図)

二 兔唇手術

(一)手術の準備

(二)一般術式

(三)偏側性兔唇手術法

Hagedorn 法等 7 枚の手術法が多く、の模式図(外国文献)を用いて示されている。(第11図～19図)

(四)両側性兔唇手術法

König 法他多くの手術法が模式図(外国文献)を元に記載されており、第25図として兔唇、千葉県立病院外科外来の症例が示されている。(図8, 第20図～26図)

次いで手術法の選択、兔唇手術の後療法及後手術が記載されている。

三 胎生期破裂及裂溝部に於ける異常

小口症、先天性瘻(下唇瘻等)が記載されてい

リト云フベシ

ローレンツ法 Lorenz's Method
Lorenz's Method

氏ハ畸形高度ナル時ハ突出セル顎間骨ヲ犠牲ニ供シ其残存セ

ムニ至ルト云フ

次ノ二種ノ新手術法ハ突出セル顎間骨ヲ有スル兩側兔唇ノ手術ニ際シ鼻ノ改善ニ顧慮セルモノナ

リト云フベシ

ヲ發見シ得ザルモノアリ、加フルニゴツトヘルフ及バルチュ等ノ觀察ニ據レバ正中片ヲ切除スルモ

多數例ニ於テハ後ニ至リ顯著ナル畸形ヲ殘スコトナク且ツ上顎歯ガハ下顎歯ガト善良ナル咬合ヲ營

良ニシテ外貌修飾手術ヲ行フニ當リ何等ノ用途

ニ適應スルモノニ非ズ、屢々顎間骨ノ發育甚不

状有莖癬ヲ採取シ其醜形ヲ改善シ得(シモ)

突出セル顎間骨ノ保存ハ必ズシモ總テノ場合

上唇ガ強度ニ後方ニ退却セル時ハ下唇ヨリ楔

テナリ

同時ニ齒牙ノ發育不良ニシテ齒列不整ナルヲ以

顎間骨ヲ保存セントスル總テノ手術法ハ正中片切除後ニ起ルガ如キ外貌ノ醜惡ヲ避ケンガ爲ニ外

ナラズ、然レドモ其機能ノ改善ニ關シテハ多クヲ期待スルヲ得ズ、コレ顎間骨ガ常ニ可働性ナルト



唇 兔 圖 五 十 二 第
來外科病院立縣葉千

図 8

る。(第27図)

四 口蓋破裂

定義、原因等に引き続き種類及形態として三項目が記載されている。(第28図口腔發育)

(一)硬口蓋破裂(第29図～31図)

(二)軟口蓋破裂

(三)粘膜下破裂等が記載されている。

障碍

(1)粘膜の炎症

(2)摂食障碍

(3)発音障碍が記載されている。(第32図～34図)

五 口蓋破裂手術

(一)手術の種類、(二)手術の準備の後に造口蓋術が記載されている。

造口蓋術

(一)破裂縁の作創

(二)口蓋諸筋の切断

(三)口蓋苞被の側方切開

(四)粘膜骨膜性口蓋被覆の剝離

(五)破裂縁の結紮縫合

の5部に分割し、口蓋諸筋、作創法、器具等が記載（外国文献）されている。（第35図～39図）次いで後療法が示されている。

更に最高度の口蓋破裂手術として基本的なランゲンベック手術法の他に多くの手術法を併用する術式が記載されている。

最高度の口蓋破裂手術

- (一) レーン法（第40図～41図）
- (二) クラスケ法他
- (三) 歯槽弓の狭窄を利用する方法
- (四) 歯牙矯正術と因子法
- (五) プロフィー法他（第42図～50図）
- (六) コヅィヴィラ法他
- (七) その他の硬口蓋作成法
- (八) 特殊の造口蓋術

それらについて手術術式、模式図（外国文献）が詳細に記載されている。

次いで手術時期の一項目が加えられている。（第51図～52図）

六 口蓋補綴術

口蓋栓塞子等が図示されて記載されている。（第53図～63図）

七 顎骨畸形

多種多様で完全と記載することはできないとして重要なものにとどめるとの記載があり、巨舌症、下顎骨畸形、倭小症等について簡単に記載されている。（第64図～65図）

第一章 口腔成形異常論は91頁より成り立っている。図は65図に及んでいる。

第二章 口腔外傷論

顔面における外傷については一般外科に関するものを省略し歯牙及び顎骨に於ける外傷について記載すると前段にのべられている。

- 一. 口腔粘膜外傷
- 二. 歯牙折傷
- 三. 歯牙脱臼
- 四. 上顎骨骨折
- 五. 下顎骨骨折
- 六. 下顎脱臼の順に記載されている。

一 口腔粘膜外傷

口腔創傷、口腔褥瘡性潰瘍、口腔粘膜腐蝕、口腔粘膜火傷の四項目に分類され、各々症状、処置等が記載されているが、文章のみで図表、写真等はない。

二 歯牙折傷

原因、症候、併発症及続発症、予後、診断、処置、の順に記載されているが、図表、写真等はない。

三 歯牙脱臼

原因、症候、併発症及続発症、予後、診断、処置の順に記載されているが、図表、写真等は示されていない。

四 上顎骨骨折

一部骨折、全骨折、上顎正中骨折について症候、診断、予後、処置の順に記載されている。

五 下顎骨骨折

原因、症候について述べ、歯槽突起の骨折、体の骨体、下顎板の骨折、顆状突起の骨折、烏喙突起の骨折について診断、予後、処置の順に記載されている。

処置として整復、固定法について述べ、顎骨骨折固定法として口腔外固定法、双合的固定法について述べ、繃帯、上顎、下顎骨折副木等が図示されている。（第66図～75図）

次に口腔内固定法として全層線縫合、全屈副木、歯間副木、全屈線結紮等が図示されている。（第76図～86図）

六 下顎脱臼

原因、症候、処置の順に記載されているが図示はない。

次に陳旧性下顎脱臼、習慣性下顎脱臼、習慣性下顎半脱臼、下顎後方脱臼、下顎外方脱臼の順に記載され、矯正繃帯、固定装置が示されている。（第87図～88図）

口腔外傷論は92頁から133頁迄42頁に亘り記載されている。図は24図である。

第三章 口腔炎症論

- 一. 口内炎
- 二. 歯齦炎
- 三. 歯齦肥大
- 四. 生歯障碍
- 五. 智歯難生
- 六. 埋伏歯
- 七. 顎骨骨膜炎
- 八. 顎骨骨髓炎
- 九. 顎骨骨疽
- 十. 顎骨燐骨疽
- 十一. 歯瘻及唾液瘻

十二. 口底蜂窩織炎

十三. 舌炎

十四. 上顎竇蓄膿症

十五. 顎関節炎

十六. 牙関緊急の 16 項目となっている.

一 口内炎

加答児性口内炎

原因, 症候, 予後, 診断, 処置について記載されている.

潰瘍性口内炎, 芽生菌性口内炎, 汞毒性口内炎, 壊疽性口内炎等についても同じ項目について記載されている.

第 89 図に水癌穿孔, 第 90 図に水癌の症例が千葉県立病院第二外科の症例として呈示されている.

二 歯齦炎

歯齦縁炎, 慢性歯齦炎について記載されている.

三 歯齦肥大, 四. 生歯障害については症例の呈示はないが, 口内炎と同様な項目順に記載されている.

五 智歯難生

処置の項に炎症の軽微なものは歯齦をクーリオ歯齦切除鉗子で同形を切除するとして鉗子が呈示されている.

六 埋伏歯

簡単に記載されている.

七 顎骨骨膜炎

急性化膿性のものと潜行性の両者に分類している.

八 顎骨骨髓炎, 九 顎骨骨疽

症例の呈示はなし (簡単に記載されている.)

十 顎骨燐骨疽

燐中毒の結果として生ずる特殊な顎骨骨疽で重篤な症状を呈することが記載されている.

十一 歯瘻及唾液瘻

歯齦瘻, 皮膚瘻に分類して記載されている.

十二 口底蜂窩織炎

項目別に簡単に記載されている

十三 舌炎

浅在性, 広汎性に大別し, 急性, 亜急性, 慢性にまで分類している.

浅在性舌炎

急性浅在性舌炎, 地図状舌, Möller 氏舌炎, 毛舌又は黒舌の順に記載されているが, 症例の呈示

はない.

広汎性舌炎

急性広汎性舌炎, 舌膿瘍, 慢性広汎性舌炎について簡単に記載されている.

十四 上顎竇蓄膿症

処置の項に顎竇穿孔子 (第 92 図), 93, 94 図に顎竇栓塞子が呈示されている.

十五 顎関節炎

急性, 慢性に分け記載されている.

急性顎関節炎

急性癱瘓性顎関節炎, 淋毒性顎関節炎, 化膿性顎関節炎.

慢性顎関節炎

畸形性顎関節炎, 慢性癱瘓質性顎関節炎, 結核性顎関節炎, 黴毒性顎関節炎の順に記載されている.

十六 牙関緊急

顎関節攣縮と顎関節強直症に分類している.

顎関節攣縮

急性攣縮性牙関緊急, 慢性攣縮性牙関緊急の順に記載されている.

顎関節強直症

症例の呈示はないが, 原因, 病理, 症候, 診断, 処置の順に記載されている.

口腔炎症論は 134 頁から 218 頁の 45 頁に亘って記載されている. 図は 7 図のみである.

第四章 口腔肉芽性炎症論

肉芽性炎症いわゆる特異性炎について記載されている.

一 口腔黴毒

初期症状として症候, 診断, 処置の順に記載されている.

第二期症状

1. 紅斑性黴毒疹, 2. 血疹性黴毒疹,
3. 乳白斑

第三期症候

(一) 口唇第三期黴毒

1. 黴毒性浸潤, 2. 黴毒性潰瘍

(二) 舌第三期黴毒

1. 硬化性舌炎, 2. 舌護謨腫

(三) 軟口蓋, 咽喉の第二期変化

(四) 顎骨護謨腫

第 95 図に上顎護謨腫をして千葉県立病院外来の症例が呈示されている.

二 口腔結核

顔面狼瘡，口腔結核，舌結核，顎骨結核

1. 接続性蔓延によるもの，2. 原発性血行伝染により発生する顎骨結核，について，症候，予後，診断，処置について記載している。

三 顎骨放線状菌症

原因を挙げ，症候として1. 因縁性放線菌症，2. 中枢性放線状菌症，診断，処置として1. 手術後処置，2. 手術と同時に沃度加里の内服を挙げている。

四 口腔癰

症候，経過，診断，予後，処置について簡単に記載されている。

本文は219頁から241頁の23頁を占めている。図は95図の上顎護謨腫，96図の鞍鼻，の2図のみである。

第五章 口腔腫瘍論

一 歯系腫瘍

濾胞性歯牙囊腫

症例中の第97図に下顎濾胞性歯牙囊腫(千葉県立病院外来)の症例が呈示されている。

処置として，(1)古法，(2)パルチェ法，(3)摘出法の3法が記載されている。

歯根囊腫

原因としての諸説，症候，診断，予後，処置について記載されている。

珐瑯上皮腫(顎骨多胞性囊腫；良性中枢性上皮細胞腫)

症候中に第98図として下顎骨珐瑯腫(千葉県立病院外科)の症例が呈示されている。

歯牙腫

単純性歯牙腫，合成的歯牙腫に大別し，単純性歯牙腫は更に独立性歯牙腫，附隨性歯牙腫に分類している。

二 繊維腫

歯齦腫

第99図として上顎歯齦腫(千葉県立病院外来)の症例が呈示されている。

顎骨繊維腫

舌繊維腫

以上について原因，病理，症候，予後及診断，処置等について記載されている。

三 囊腫

皮様囊腫，蝦囊腫，口唇囊腫の順に簡単に記載

されている。

四 軟骨腫及骨腫

軟骨腫

骨腫

症候，診断，予後，処置等について記載されている。

顎骨の腫瘍状骨肥大症

上顎骨に瀰蓋性に緩徐に進行する骨肥大症について記載している。

五 血管腫及リンパ管腫

血管腫

単純性血管腫と海綿状血管腫に分類し，症候，診断，処置について記載されている。

リンパ管腫

第100図に巨舌症(千葉県立病院外科)の症例が呈示されている。

六 脂肪腫及粘液腫

簡単に記載されている。

七 内皮細胞腫

口蓋に好発し，耳下腺混合腫瘍と同一疾患であることを述べ，稀に繊維腫及肉腫を生ずるとして第101図に上顎粘液肉腫(千葉県立病院外科)の症例が呈示されている。

八 癌腫

口唇癌，舌癌について症候，診断，予後，処置について記載されている。

顎骨癌腫

第102，103図に上顎癌腫(図9，千葉県立病院外科)，第104図に上顎癌腫の口腔内の症例が呈示されている。

九 肉腫

顎骨肉腫，舌肉腫について原因，病理，症候，診断，処置の順に記載されている。

十 顎骨切除術

全部性顎骨切除術と一部性顎舌切除術と分類している。

上顎骨全摘出術

(一)患者の体位，(二)皮膚切開，(三)軟組織弁の剝離，(四)上顎骨と隣接骨間に於ける骨性連結の切断，(五)顎骨の摘出，(六)上顎骨全摘出術の異型の順に記載されているが，手術術式等の図示等は呈示されていない。

上顎骨切除副木

予備的副木，上顎骨切除副木，含気性栓塞子の

等ニヨリ惹起セラル、磨擦性潰瘍(磨擦性潰瘍)ヨリ發生シ或ハ硬口蓋ノ微毒性癰疽或ハ長年月間存在セシ齒癰ノ開口部ヨリ發生スルコトアリ、又時トシテ癌ノ家族的因素ヲ證明シ得ルコトアリ

(三) 症候 顎骨癌ノ症候ハ初期ニ於テハ周縁性及中樞性癌ノ際ニ於テ多數ノ點ニ於テ差違ヲ有ス齒槽突起ノ癌ハ多クハ瘡堤狀ニ隆起セル緣ヲ有スル齒齦上ニ於ケル潰瘍トシテ發生シ、時トシテ潰瘍附近ノ骨ハ肥厚及軟化ヲ呈シ容易ニ針ヲ以テ穿貫スルヲ得、齒牙ハ弛緩動搖シ遂ニハ脱落スルニ至ル、疼痛ハ初期ニハ通常存在スレトモ時トシテ之ヲ缺如セルコトアリ、上顎骨ニ於テハ齒槽突起ノ癌ハ腰々既ニ初期ニ上顎竇底ヲ穿孔シ又下顎骨ニ於テハ口腔底ニ蔓延侵襲ス、晚期ニ至レハ下顎骨ノ特發性骨折ヲ來スコト稀ナラズ

潰瘍狀ノ癌以外ニ稀ナレトモ顎骨ニハ類囊或口腔内ニ突出セル乳頭樣腫瘍ヲ生ズ、此ノ如キ腫瘍ハ又齒齦性癌或ハ癌腫性齒齦腫トモ稱セラル、此場合ニハ顎骨ハ潰瘍狀ノ癌ノ場合ニ比シ晚期ニ至リ始メテ犯サルヲ常トス

中樞性上顎骨癌ハ劇痛ヲ以テ始マリ腰々齒痛ヲ訴ヘ患齒及健全齒ヲ拔去セラル、コトアリ、鼻粘膜ノ浮腫ハ早期ニ現ハレ又腫瘍ガ鼻腔内ニ増殖シ



腫瘍顎上 圖二百第
(科外院南立縣葉千)

図 9

順に記載され、栓塞子も図示されている。

顎骨一部切除術

簡単に記載されている。

下顎骨切除術

下顎骨の連続離断的切除、下顎骨半側の関節離断、下顎骨の全摘出について記載されているが、手術術式の図示等は記載されていない。

下顎骨補綴術

(一) 切除副木

副木の装着時期等の前段があり各種の副木が図示されている。

(二) 即時副木

各種の副木が図示されている。

(三) 嵌植副木、(四) 生活骨嵌植術、(五) 二次的下顎骨切除副木について簡単に記載されている。

口腔腫瘍論は242頁から316頁迄の75頁に亘って記載されている。図は27図である。

第六章 口腔神経症論

一 三叉神経痛 二 顔面神経痛

症候、診断、予後、処置について記載されている。

る。

三 舌味覚障害

味覚脱失、味覚異常について簡単に記載されている。

317頁から321頁の5頁に記載され、図示はない。

第七章 歯科外科手術論

歯科外科手術

一 麻酔法

全身麻酔法と局所麻酔法と分けている。

全身麻酔法

- (一) クロロフォルム麻酔法
- (二) エーテル麻酔法
- (三) 亜酸化窒素麻酔法
- (四) プローム、エチール麻酔法
- (五) 混合麻酔法
- (六) 併合麻酔法

局所麻酔法

表面性麻酔法

粘膜骨膜注射麻酔法

(一) 歯牙の分布神経

第123図に歯牙の分布神経(Braun)の模式図が示されている。

(二) 注射法

1. 消毒、2. 注射器について記載されている。
3. 注射液、一般には2%ノボカイン・アドレナリンを使用。

4. 注射法の種類

主として骨膜注射法または骨膜下注射法について記載されている。

5. 注射部位

原則は唇規側、口蓋舌側、遠心側および近心側の4か所で歯根歯端は向かって注射することが記載されている。

6. 術式

一般術式が記載され、注射器の執筆状保持、注入時の手勢が図示されている。

7. 上顎における注射法

前歯部、小臼歯部、大臼歯部の麻酔について記載されている。

8. 下顎の末梢枝の麻酔について

各部位についての麻酔が図示されている。

伝達麻酔法

(一) 上顎神経の伝達麻酔法

(1) 下眼窠孔注射法, (2) 上顎結節部注射法, (3) 前口蓋孔注射法, (4) 門齒孔注射法, (5) 正円孔注射法の順に記載され, 正円孔に対する注射法が図示されている。

(二) 下顎神経の伝達麻酔法

(1) 下顎小舌部注射法

注射法が図示されている

(2) 頤孔注射法

(3) 卵円孔注射法

注射法が図示されている。

(4) ガッセル神経節穿刺法

注射法が図示されている。

(三) 上顎骨全摘出に対する局所麻酔法

(1) 外側眼窩内注射, (2) 内側眼窩内注射, (3) 鼻翼近部注射について記載されている。偏側上顎切除に対する注射部位の範囲が点線で記入されている。

(四) 下顎骨手術

左側下顎骨体切除に対する注射部位の範囲が点線で図示されている。

二 抜歯術

抜歯器機

主として使用される羊足状挺子, 齒根挺子, 抜歯鉗子について図示して記載されている。

抜歯の適応症

(一) 乳歯抜歯の適応症, (二) 永久歯抜歯の適応症

(1) 健全な永久歯抜歯の適応症, (2) 罹患永久歯抜歯の適応症, (3) 義歯製作時の抜歯の適応症について記載されている。

禁忌症

絶対的禁忌症はなく, 多くは比較的禁忌症であるとし, 妊娠等 8 項目を挙げている。

抜歯時の位置, 鉗子の把持法及操作

鉗子の把持法について図示されている。

抜歯の一般原則

鉗子の選択等 9 項目を挙げている。

上顎歯牙の抜去

各部位についての抜歯法が記載されている。

下顎歯牙の抜去

各部位の抜去法について記載され, 下顎前歯用鉗子が図示されている。

齒根の抜歯

主として上顎齒根の抜去について記載されてい

る。

齒根切除法

抜去すべき齒根を被う齒根と齒槽とを同時に切断し齒根を除去する法であり, 治療に長時間を要し, 実質欠損大なるため本法は絶対的に避くるを可とすとあり, 齒根鑿除法が勝ると記載されている。

齒根鑿除法

鉗子及挺子にて抜去困難で齒槽内に齒根のみが残存している場合に行うとの前段が記載されている。

下顎, 上顎に分け, 図示にて説明されている。

齒槽骨鑿除法

齒槽骨の一部を鑿除し, 齒根の上部に抜歯鉗子の適用を可能ならしむる場所を作成するを目的とすと記載されているが, 図示はない。

齒根分離法

多根の場合に齒根を分離する方法で簡単に記載され, 図示はない。

下顎齒根の抜去

各部位に対する抜去法が記載されている。図示はない。

乳歯の抜去

上顎乳歯の抜去, 下顎乳歯の抜去, 乳歯根の抜去について簡単に記載されている。

抜歯の後処置

術者に対する注意, 周囲組織の損傷, 止血の検査, 創傷痛, 抜歯窩の疼痛について記載し, その処置は多くの場合あまり効力がないことが記載されている。

抜歯時及抜歯後の偶発症

(一) 歯牙自己或いは隣在歯に生ずる抜歯時の傷発症

(1) 歯牙の折傷, (2) 降在歯の折傷, 脱臼, (3) 継承歯芽胞の抜去, (4) 鉗子扼頭の破折, (5) 健全歯の誤抜

(二) 顎骨に於ける抜歯時の偶発症

(1) 齒槽突起の骨折, (2) 齒槽骨片の除去, (3) 顎骨の全骨折, (4) 下顎脱臼, (5) 上顎竇の穿通

(三) 軟組織に於ける抜歯時の偶発症

(1) 齒齦の挫傷, 裂傷及剝離, (2) 口唇頰及舌の挫傷及裂傷, (3) 気腫, (4) 出血

(四) 抜歯後の偶発症

(1) 出血, (2) 腫脹, (3) 炎症, 膿瘍, 敗血症及壊死,

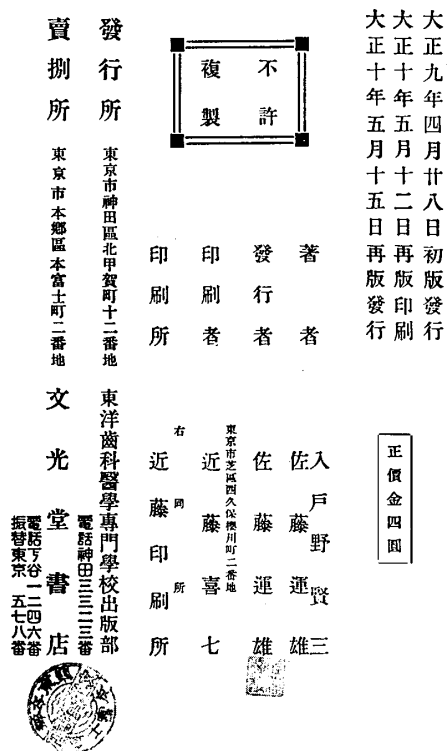


図 10

(4) 気道及消化系への歯牙の侵入, (5) 神経症及神経痛, (6) 抜歯後の知覚麻痺, (7) 牙関緊急, (8) 破傷風, (9) 脳貧血及失神, (10) 五管器領域における障害

以上について詳細について記載されているが, 図示はない。

三 植歯術

植歯術の定義を述べ, (1) 歯牙再植術, (2) 歯牙移植術, (3) 歯牙簀植術の三者に区別して記載し, 予後, 適応症, 術式について記載しているが, 図示はない。

四 歯根端切除法

(一) 適応症, (二) 術式の順に記載され, パルチェの切開法, 粘膜骨膜弁翻転及歯根露出の模式図および使用する器械器具が図示されている。

五 歯槽開窓術

歯根端切除術と略同一の術式であり, 利点欠点が記載されているが, 図示はない。

第7章は322頁から428頁迄の107頁に亘って記載され, 図は72図に及んでいる。

口腔外科学索引

イロハ順に5頁に亘り記載されている。

奥付

発行日, 著者, 発行者, 印刷者, 印刷所, 発行所, 売捌所, 定価が記載されている (図10)。

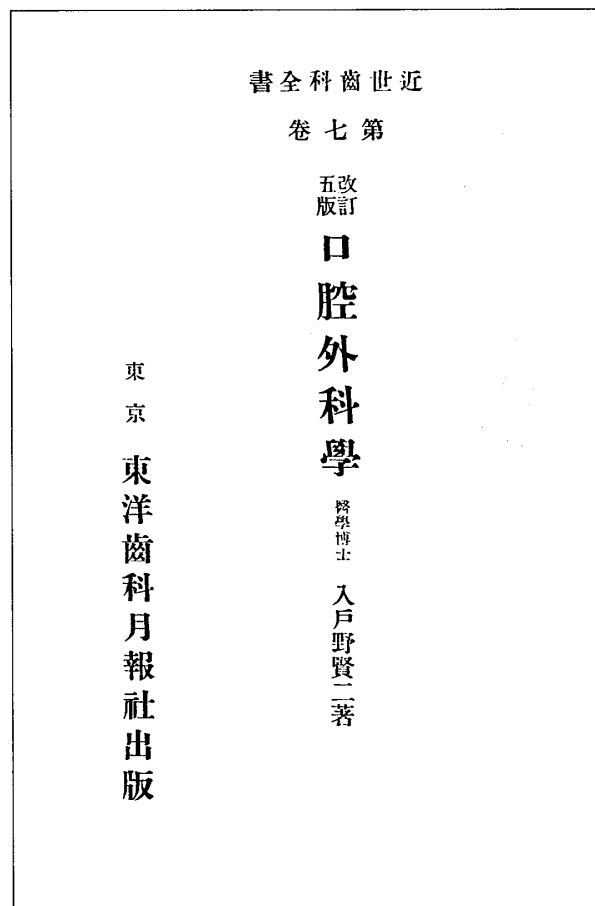


図 11

2) 入野「口腔外科学」について

入野単著としては大正12年(1923)4月30日に三版として発刊され, 今日, 資料として用いたのは大正13年(1924)9月5日発刊の五版である (図11)。

五版は横14.8 cm, 縦21.8 cm, 厚さ2.3 cm, 目次5頁, 本文461頁, 図209図, 索引6頁, 黒色厚紙カバーの著者である。まず近世歯科学全書の序, 次に序は大正9年2月下旬の佐藤生として再版と同じ序が載っており, 改訂三版序として大正12年4月入野生識として各章に亘り加筆した等の記載がある (図12)。

次いで近世歯科学全書12巻のタイトルと著者名が記載されている (図13)。

目次は第一章口腔成形異常論から第七章歯科外科手術論まで再版と同じである。

第一章の前文として口腔外科学の定義が述べられている。

第一章 口腔成形異常論

一. 顔面破裂形成から七. 顎骨畸形までの七小項目は再版と同じである。

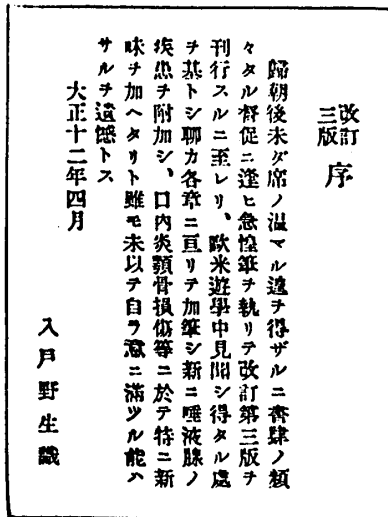


図 12 改訂三版序

本書ハ全部約十二卷ヨリナリ齒科醫學ノ凡テノ課目ヲ網羅ス
課目及執筆者左ノ如シ (○既刊) ×近刊

×第一卷	齒科解剖學	東齒醫學士	中川大介
×第二卷	齒科組織及胎生學	日齒醫學士	國分史樹
第三卷	齒科生理學	醫學士	伊東準治
○第四卷	齒科藥物學	醫學士	佐藤左雄
○第五卷	齒科病理學	醫學士	中佐藤左雄
○第六卷	齒科治療學	醫學士	佐藤左雄
○第七卷	口腔外科學	醫學博士	入野生蔵
×第八卷	齒科矯正學	醫學士	佐藤左雄
○第九卷	齒科充填學	醫學士	佐藤左雄
×第十卷	齒科技工學	醫學士	川合雄
○第十一卷	齒科鑲架工學	醫學士	飯塚喜四郎
第十二卷	齒科材料學	醫學士	羽生長一郎

図 13

一 顔面破裂形成

再版で図示された唇顎破裂 (第 6 図) と正中鼻破裂 (第 10 図) は 5 版では省略され、再版の計 10 図に比較して 2 図少なくなっている。

他の二から七の小項目は再版とほぼ同じである。

第 1 章は 86 頁、図は 63 図となっている。

第二章 口腔外傷論

小項目は再版では一、口腔粘膜外傷、二、齒牙折傷、三、齒牙脱臼、四、上顎骨骨折、五、下顎骨骨折、六、下顎脱臼の順に記載されているが、齒牙折傷、齒牙脱臼の小項目はなくなり、唾液腺の創傷が加えられている。

すなわち一、口腔粘膜外傷、二、上顎骨骨折、三、下顎骨骨折、四、下顎脱臼、五、唾液腺の創傷となっている。

一 口腔粘膜外傷

再版では記載されていない舌下潰瘍 (百日咳潰瘍)、ベドナール氏要布答が追記されている。但し症例の呈示はない。

二 上顎骨骨折

再版とほぼ同じ記載である。

三 下顎骨骨折

五版では再版に呈示されていない下顎骨骨折の好発部位が図示されている。また鑲釘伸展法、その X 線像、多くの副木が図示されている。また顎骨整復の図も呈示されている。

四 下顎脱臼は再版とほぼ同じである。

五 唾液腺の創傷

耳下腺の創傷として耳下腺導管の創傷、唾液瘻として (一) 耳下腺瘻、(二) 耳下腺導管瘻について述べ、唾液腺導管瘻手術の模式図が示されている。

また異物、唾石について記述されている。

第二章は 87 頁から 134 頁迄の 48 頁、図は 37 図である。

第三章 口腔炎症論

再版では 16 の小項目であるが、五版では 18 の項目となっている。再版の一、口内炎の次に二、頬及舌白斑が記載され、十二、齒瘻及唾液瘻は齒瘻のみとなり、十八として唾液腺の炎症が追加され十八小項目となっている。

一 口内炎

再版の加答児性口内炎、潰瘍性口内炎の次に匍行診性口内炎 (Stomatitis herpetica) の項目が加えられている。

二 頬及舌白斑

再版にはない項目で角化症を本態とする帯青白色或いは白色の斑点或いは線条を形成する粘膜の慢性疾患であると記載されている。

六 智齒難生

第 102 図に難生智齒 X 線像 (著者原図) が始めて X 線像が呈示されている。

十七 牙関緊急

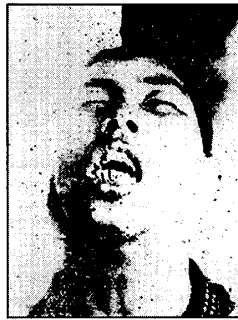
第 106 図 (図 14) に幼時に罹患せる下顎骨髓炎に因する陳旧性牙関緊急 (著者原図) 第 107 図に同上側面を示す著名なる鳥貌を有す (著者原図) として症例が呈示されている。これは再版では呈

發生スト云フ

(一) 原因 外傷(約二九%)、顎關節ノ化膿性炎(二三%)、化膿性中耳炎ニ繼發スルモノ(二三%)、下顎骨々髓炎(二%)、顎關節ノ硬質質斯、及淋毒性炎(一〇%)、等アリ、稀ニ先天性癒着ヲ有シ而カモ其原因ヲ分曉時ノ外傷ニ歸シ得ザルモノアリ

顎關節強直ヲ惹起スル外傷ハ主トシテ修復セザル顎關節脱臼、烏啄突、起ノ頸部骨折及腭口ノ陷凹等ナリ、此ノ如キ場合ニ於ケル外傷ノ誘因ハ屢々頤上ニ作用セル暴力ニシテ臨床上常ニ外傷ニ起因スル耳出血ヲ見ル

運動制限ハ症例ノ一部ニ於テハ屢々比較的顯著ナラザル暴力作用シ最初疼痛著シカラザルモノニ於テ徐々ニ發生ス、又鈍器ハ關節頭ヲ粉碎シ後ニ腐骨痕ヲ排除スル時ハ關節強直ヲ惹起スルコトアリ又分曉時ニ針子ヲ使用スル時ハ頭蓋底或ハ關節附近ノ下顎骨ノ骨折ヲ起シ其後發結果トシテ關節強直ヲ招クコトアリ、此ノ如キモノハ屢々先天性關節強直ト誤認セラレ



顎骨頤下ルセ患種ニ時幼 圖六百第
(圖原者著)急緊關牙性齒膿ルニ因ニ炎

図 14

示されていない。更に第 108~110 図に開口器装着，開口器，拡大装置が図示されている。

十八 唾液腺の炎症

再版ではない項目で新たに新設された項目である。

急性原発性唾液腺炎(流行性耳下腺炎)，急性続発性唾液腺炎，主要導管の炎症等の記述があり 5 頁に及んでいる。

第三章は 135 頁から 231 頁迄の 97 頁で図は 12 図を占めている。

第四章 口腔肉芽性炎症論

一から四迄の十項目は再版と同じである。

一 口腔微毒

再版に図示された上顎護誤腫鞍鼻の症例が削除されている

二 口腔結核

五版では新たに唾液腺結核の項目が挿入されている。

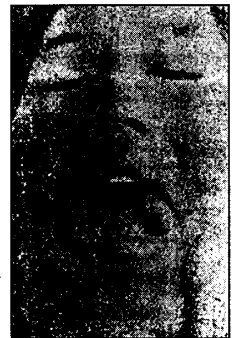
第四章は 232 頁から 256 頁の 25 頁で図は示されていない。

第五章 口腔腫瘍論

唾液腺纖維腫

Phibros of Salivary Glands
Phibros der Speicheldrüsen

纖維腫ノ純粹ナルモノハ甚少ナク、混合腫瘍トノ區別困難ナリ



顎囊様皮 圖五百十第
(圖原者著)

図 15

再版では小項目は十項目であるが，五版では十一項目になっている。

再版七の内被細胞腫は五版では内被細胞腫及乳嘴腫となり，十で混合腫瘍が追加されて十一項目になった。

一 齒系腫瘍

齒根囊腫に再版に呈示されていない図として第 112 図 濾胞性齒牙囊腫 X 線像(著者原図)が挿入されている。

三 囊腫

皮様囊腫，蝦囊腫について再版よりも詳細に記述されている。第 115 図に皮様囊腫(図 15，著者原図)が新たに呈示されている。

また新たに唾液腺囊腫として(一)唾液腺導管囊腫，唾液腺囊腫について記載されている。また口唇囊腫が粘液腺の閉塞により潑溜囊腫の発生することが記載されている。

七 内被細胞腫及乳嘴腫

乳嘴腫について新たに記載され，良性上皮細胞腫で口唇及口腔粘膜，舌上に生ずるとして第 118 図に上顎骨内被細胞腫(著者原図)の症例が呈示されている。

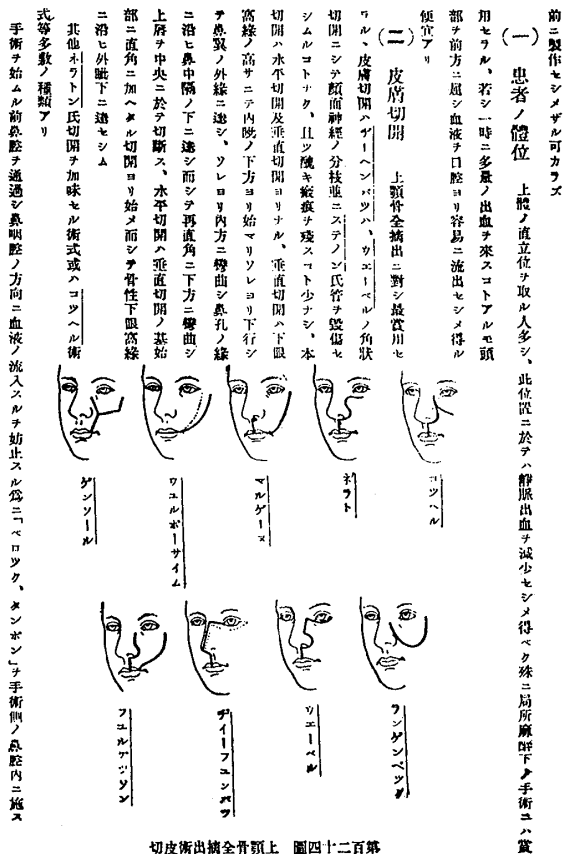


図 16

八 癌腫

第 119 図に舌癌（著者原図）の症例が新たに呈示されている。

口底癌、頬粘膜癌についても新たに記載されている。

顎骨癌腫

第 122 図に上顎肉腫手術後（顔貌）（著者原図）が新たに呈示されている。

唾液腺癌腫についても新たに記載されている。

九 肉腫

顎骨肉腫の項に第 123 図として上顎歯槽突起を広汎性に犯せる肉腫（著者原図）の症例が呈示されている。

唾液腺肉腫

唾液腺の真正肉腫は稀であり他の肉腫と区別困難なことを述べている。

十 混合腫瘍

唾液腺混合腫瘍として新たに呈示され、重要な混合腫瘍として 3 頁余に亘り記載されている。

十一 顎骨切除術

上顎骨全摘出術の皮膚切開に関して第 124 図に

發行所

東京
東京市本郷區本富士町二番地

東洋齒科月報社
文光堂書店
電話下谷二二四六番
振替東京五七八番



著者 入戸野賢二
發行所 佐藤運雄
印刷所 近藤喜七

東京市芝區櫻川町二番地
近藤喜七
東京市芝區櫻川町二番地
近藤喜七

図 17

コッヘル氏法他 9 氏の皮膚切開の模式図が呈示されている。再版ではこの模式図は図示されていない（図 16）。

下顎骨補綴術には多くの副木が図示されている。

第 5 章は 259 頁から 349 頁の 91 頁に亘って記載され図は 30 図である。

第六章 口腔神経症論

記述は再版と全く同じで 350 頁から 354 頁の 5 頁で図も再版と同じで呈示されていない。

第七章 齒科外科手術論

一、麻酔法、二、抜歯術、三、植歯術、四、齒根切除術、五、齒槽開窓術の小項目は再版と同じである。

一 麻酔法

伝達麻酔法（一）上顎神経の伝達麻酔 正円孔に対する注射法は再版と異っている。（二）下顎神経の伝達麻酔法 卵円孔に対する注射法は再版と異なっている。他は再版とほぼ同じである。

第七章は 355 頁から 461 頁迄の 107 頁に亘って記載され、図は 68 図である。

口腔外科学索引

イロハ順に 6 頁に亘り記載されている。

奥付

発行日、著者（入戸野賢二）、発行者、印刷者、印刷所、発行所、賣捌所、定価等が記載されている（図 17）。

5. 考 察

一入戸野、佐藤共著「口腔外科学」(大正 10 年 5 月発行, 再版)と入戸野単著「口腔外科学」(大正 13 年 9 月発行, 五版)の変遷に関する検討—

大正 5 年 (1916) 4 月 15 日に東洋歯科医学校を創設した佐藤は各科目の教科書の発刊に迫られ, 大正 6 年 (1917) 正月に近世歯科全書を刊行することを企画した. その第 7 巻に入戸野, 佐藤の共著による「口腔外科学」が企画されている^{10,11)}.

入戸野は佐藤と共に東京帝国大学医科大学歯科学教室の同門であり, 両者共に文部省歯科医術開業試験委員として共通の期間があり, 親しい関係から「口腔外科学」の著書の発行を依頼したものと思われる.

入戸野は大正 7 年 (1918) 7 月千葉医学専門学校教授に昇任し, 同時に第 2 外科部に歯科診療施設が設置されている^{1~6)}.

入戸野, 佐藤共著の「口腔外科学」は大正 9 年 (1920) 4 月に初版が発行されている¹⁰⁾.

佐藤は入戸野に「口腔外科学」の著書の発行を依頼したにも拘らず, 入戸野は大正 7 年 (1918) 8 月千葉県および文部省から口腔外科学研究のため海外留学を命ぜられ, 2 年 7 か月後の大正 10 年 (1921) 3 月に帰国した^{1,10)}.

初版の「口腔外科学」は大正 9 年 (1920) 4 月 28 日に発行されている¹⁾. したがって発行の際には入戸野は留学中であつた.

初版の序で佐藤は本書は殆んど入戸野君の筆になる. 脱稿する直前に海外留学のため, 章句の排列を整え, 小欠陥を補填したのみで, 入戸野君帰朝の上, 氏が新たに得たる智識と多年の経験とによって本書の改版を企てるべきを信ずとして, 本書は入戸野単著とすべきものを止むを得ず共著となったことを述べている¹⁰⁾. その後本書は大正 10 年 (1921) 5 月入戸野帰国の 2 か月後に再版が発行されている¹⁰⁾.

その後大正 12 年 (1923) 4 月に新たな構想の下に入戸野単著として発行されている¹¹⁾.

その改訂三版序には帰朝後席の温まる閑もないまま改訂の督促に逢い, 急遽, 筆をとって第三版を刊行するに至った. 欧米留学中に見聞したことを基として各章に亘って加筆し, 新たに唾液腺の疾患を付加し, 口内炎, 顎骨損傷等に於て特に新

味を加えたが未だ不十分であることを遺憾とするという入戸野の序が記載されている¹¹⁾.

今回入手し得たのは入戸野, 佐藤共著の大正 10 年 (1921) 5 月 15 日発行の再版本と大正 13 年 (1924) 9 月 5 日発行の五版本で両書を比較して検討した^{10,11)}.

五版の奥付では大正 12 年 4 月 30 日に三版と記載され, 五版は大正 13 年 9 月 1 日五版印刷, 9 月 5 日に五版発行と記載され, 四版発行の記載はない. 三版から五版までの期間は 1 年 4 か月であり, 恐らく四版は発行されなかったのではないと思われるが, 明らかではなかった. この様に三版と五版では内容に大きな差異はないものと思われる.

「口腔外科学」の初版は大正 9 年 (1920) 4 月に発行されて教科書として使用されていたと思われる¹⁰⁾. その当時入戸野は東洋歯科医学校それに続く東洋歯科医学専門学校において非常勤講師として勤務していたかどうかは千葉大学医学部, 日本大学歯学部における人事記録が不明のため明らかではなかった.

入戸野は大正 10 年 (1921) 3 月に海外留学から帰国後大正 11 年 (1922) 7 月から日本大学専門部歯科の非常勤教授として就任していることは判明しており¹⁵⁾, 学生の講義も担当している事は明らかであるが, 恐らく大正 10 年 (1921) 4 月の新学期から口腔外科学の講義も非常勤講師として担当していたとも思われるが記録が定かではなく明らかにはされなかった.

再版は本文 428 ページ, 索引 5 ページ, 文中の図は 143 図で, 五版は本文 461 ページ, 索引 6 ページ, 文中の図は 209 図であり本文で 33 ページ索引 1 ページ, 図は 16 図多い^{10,11)}.

章は第 7 章迄あり, 再版, 五版共同じである. すなわち第 1 章口腔成形異常論, 第 2 章口腔外傷論, 第 3 章口腔炎症論, 第 4 章口腔肉芽性炎症論, 第 5 章口腔腫瘍論, 第 6 章口腔神経症論, 第 7 章歯科外科手術論から成っている^{10,11)}.

改訂三版序には新たに各章に亘りて加筆し, 新たに唾液腺疾患を附加し, 口内炎, 顎骨損傷等に於て新味を加えたりと述べており¹¹⁾, これらについて考察を加える.

まず唾液腺疾患について第 2 章口腔外傷論項目の 5 として唾液腺創傷を加え, 耳下腺の創傷, 唾液瘻として耳下腺瘻, 耳下腺導管瘻の中には手術

図の模式図, 異物, 唾石として 123 ページから 134 ページの 11 ページに亘って新たに加筆されている¹¹⁾。

第 3 章口腔炎症論では唾液腺の炎症の項目が加わり, 急性原発性唾液腺炎, 急性続発性唾液腺炎, 重要導管の炎症として 227 ページから 231 ページ迄の 4 ページに亘って新たに加筆されている。但し模式図, 症例等は図示されていない¹¹⁾。一方, 再版の 11. 歯瘻では五版で外傷の項目に唾液瘻が移動したため, 歯瘻のみとなっている¹⁰⁾。

第 4 章口腔肉芽性炎症論では口腔結核の中に唾液腺結核が 2 ページに亘り加筆されている¹¹⁾。

第 5 章口腔腫瘍論では再版では 3. 嚢腫として皮様嚢腫, 蝦蟇腫, 口唇嚢腫について 264 ページから 266 ページの 2 ページに亘り記載されているが, 第五版では 281 ページから 287 ページの 6 ページに亘って記載されており, 特に皮様嚢腫, 蝦蟇腫について詳細に記載され, 更に唾液腺嚢腫として唾液腺導管嚢腫, 唾液腺嚢腫に分けて図示はないが, 新たに記載されている^{10,11)}。

8. 癌腫中に頬粘膜癌として新しく 1 ページが加筆され, 唾液腺癌腫として硬性癌と髄様癌に分け 2 ページに亘って加筆されている。

10. 混合腫瘍については唾液腺混合腫瘍として 323 ページから 326 ページの 3 ページに亘り図示はないが, 新たに加筆されている¹¹⁾。

次に口内炎, 顎骨損傷等について特に新味を加えたりとの序によって検討すると第 3 章口腔炎症論 1. 口内炎で再版の壊瘍性口内炎と亜布答性口内炎の間に匍行疹性口内炎 (ヘルペス性口内炎) が 2 ページに亘って加筆されている。更に再版の 1. 口内炎, 2. 歯齦炎との間に 2. 頬及舌白斑の項目が 4 ページに亘って加筆されている¹¹⁾。

顎骨損傷については第 2 章口腔外傷論では再版の歯牙折傷, 歯牙脱臼の項目が削除されており, 下顎骨々折については好発部位の模式図が記載され, 顎骨々折固定法では鑲釘伸展法の 2 図が示され, 更に X 線像, 副木の図示が 4 図追加されている¹¹⁾。

改訂三版の序には聊が各章に亘りて加筆したとあるが, 各章について加筆, 訂正等がされている¹¹⁾。さらに各章についての図について著者入戸野の特徴が示されている。

再版の図は計 193 図, 五版は 209 図である。模

式図, 器具, 症例等は外国の文献からの引用が多いが, 再版では千葉県立病院外科外来等の入戸野の経験した症例も呈示され, それは五版にも引き継がれているのが特徴的である^{10,11)}。

入戸野の症例は再版で 13 図あり, それは第 25 図の兎唇, 第 89 図の水癌穿孔, 第 90 図の水癌, 第 95 図の上顎護謨腫, 第 96 図の鞍鼻, 第 97 図の下顎濾胞性歯牙嚢腫, 第 98 図の下顎骨珙瑯腫, 第 99 図の上顎歯齦腫, 第 100 図の巨舌症, 第 101 図の上顎粘液肉腫, 第 102 図の上顎癌腫, 第 103 図の上顎癌腫, 第 104 図の上顎癌腫の計 13 図であり, 当時としては画期的なものであると思われる¹⁰⁾。

五版では計 19 図であり, 再版より 6 図多い。すなわち第 25 図兎唇は再版と同一症例である。第 95 図の暫間的下顎副木, 第 96 図の下顎副木は著者原図となっているが, 再版の第 95, 96 図と同じで再版では著者原図の記載はない。第 100 図の水癌穿孔と 101 図の水癌は再版と同じである。

第 102 図の難生智歯 X 線像は著者原図として始めて X 線写真像が呈示された。第 106 図には幼時に罹患せる下顎骨々髓炎に因する陳旧性牙関緊急, 第 107 図は同上側面を示す著名なる島貌を有す (著者原図) として自験例が呈示されている。

第 111 図は下顎濾胞性歯牙嚢腫は再版と同じ図であり, 第 112 図濾胞性歯牙嚢腫 X 線像として新たに呈示されている。五版で 2 図の X 線像が呈示されたのは画期的なことである。

第 113 図下顎珙瑯上皮腫は再版の下顎骨珙瑯腫と同じ図である。第 114 図の上顎歯齦腫は再版と同じである。

第 115 図の皮様嚢腫は著者原図として新たに呈示されている。

第 116 図の巨舌症は再版と同一疾患であるが症例は別人である。

第 117 図の上顎粘液肉腫は再版の症例と同じであると思われる。再版は顔貌の写真であるが, 五版では同一症例の口腔内の肉腫が呈示されているものと思われる。

第 118 図は上顎骨内皮細胞腫の症例が新たに呈示されている。第 120 図, 121 図の上顎癌腫は再版と同じである。第 122 図には上顎肉腫手術後の症例が新たに呈示されている。第 123 図には上顎歯槽突起を広汎性に犯せる肉腫の症例が新たに呈示

されている。これらを含めて著者の症例は計 19 図である。

その他の特筆すべき図として第二章口腔外傷論で、3. 下顎骨々折で好発部位が図示されている。更に第 5 章口腔腫瘍論 11. 顎骨切除術に際して第 124 図にコッヘル氏他 9 氏の皮膚切開の模式図が呈示され、分かり易い図となっている¹¹⁾。

第 7 章歯科外科手術論では伝達麻酔については再版とかなり異なっている¹¹⁾。

本書の初版は大正 9 年 (1920) 4 月であり、入戸野 37 歳、佐藤 41 歳、再版は大正 10 年 (1921) 5 月で入戸野 38 歳、佐藤 42 歳。入戸野の単著となった三版は大正 12 年 (1923) 4 月で入戸野 40 歳で、五版は大正 13 年 (1924) 9 月で入戸野 41 歳である^{10,11)}。入戸野は昭和 2 年 (1927) 5 月に 44 歳で逝去されており、五版はその 3 年前になる。大正 12 年 (1923) 三版の序で入戸野は「未以て自ら意に満つる能はざるを遺憾とす」と述べており¹¹⁾。恐らく改訂に向けて努力されておられたことと思われるが、大正 14 年 (1925) 42 歳には千葉大学を退官され、丸ビルに開業され、また日本大学専門部歯科非常勤教授として多忙であり¹⁾、痛魔に冒されていたこともあり、根本的な改訂へは至らなかったものと思われる。

入戸野逝去後、本書はどの程度の版を重ねたかは明らかではないが、昭和 7 年 (1932) 11 月 25 日には佐藤運雄単著 (53 歳) として「口腔外科学」の初版が発行されている^{24,25)}。

6. おわりに

千葉大学医学部歯科口腔外科並びに日本大学歯学部口腔外科の創設者 入戸野賢二先生の略歴と日本大学歯学部の創設者 佐藤運雄先生その他の関係者との交流経過について報告し、更に経年的に入戸野、佐藤共著の「口腔外科学」入戸野単著の「口腔外科学」の内容について比較検討し、若干の考察を加えて報告した。

本論文の要旨は平成 15 年 10 月 18 日に開催された第 31 回日本歯科医史学会学術大会 (戸出一郎会長) において発表した。

文 献

1) 千葉大学医学部八十五年史 (歯科口腔外科教室史一佐

藤伊吉): 千葉大学医学部創立八十五周年記念会編, 千葉, p 534~545, 1964

- 2) 歯科口腔外科教室史 (入翠会誌特集), 佐藤伊吉教授定年退官記念会, 千葉, p 42~50, 1966
- 3) 佐藤伊吉: 思いでままに, 歯科創設 50 周年記念誌 (入翠会会誌通刊第 5 号), 千葉, p 2~12, 1968
- 4) 佐藤伊吉: 創設時代から近年までの医局内外, 千葉大学歯科創設 50 周年記念完結号 (入翠会々誌第 6 号), 千葉 p 20~48, 1969
- 5) 今田見信, 正木正: 日本の歯科医学教育小史, 医歯薬出版, 東京, p 51~53, p 128-129, 1977
- 6) 歯科口腔外科教室七十年の歩み: 入翠会会誌 (創刊号~第 10 号合本, 創設 70 周年記念, 千葉大学医学部歯科口腔外科同門会, 千葉, p 1~3, 1988
- 7) 佐藤伊吉: 口腔外科教室の思い出の記: 日本大学歯学部口腔外科学教室, 同門会々誌, 1(1), 2~5, 1972
- 8) 東京大学大学院医学研究科感覚運動機能医学講座口腔外科学分野創設百周年記念誌: 東京大学医学部口腔外科学教室, 東京, p 190, 1999
- 9) 金森虎男: 身辺雑記, 大日本法令印刷株式会社, 東京, p 322, 1955
- 10) 入戸野賢二, 佐藤運雄: 口腔外科学 再版, 東洋歯科医学専門学校出版部, 東京, 1921
- 11) 入戸野賢二: 口腔外科学 5 版, 東洋歯科月報社, 東京, 1929
- 12) 白土寿一, 栖原六郎編: 佐藤先生還暦祝賀記念論文集, 上巻, 佐藤先生還暦記念論文集編集部, 東京, p 1~5, 1939
- 13) 白土寿一, 栖原六郎編: 佐藤先生還暦祝賀記念論文集, 下巻, 佐藤先生還暦記念論文集編集部, 東京, p 1~4, 1939
- 14) 永井一夫, 新国俊彦他編: 佐藤運雄先生八十賀記念写真帖, 日本大学歯学部, 東京, p 1~97, 1958
- 15) 日本大学歯学部 60 年史編集委員会: 日本大学歯学部六十年史, 日本大学歯学部, 東京, p 1~336, 1979
- 16) 佐藤三樹雄, 川崎勇編: 佐藤運雄先生百年記念誌, 日本大学歯学部佐藤会, 東京, p 1~132, 1982
- 17) 榊原悠紀太郎: 歯記列伝, クインテッセンス出版, 東京, p 74~78, p 151~154, 1995
- 18) 工藤逸郎: 佐藤運雄先生と建学の理念, 日大歯学, 71(3), 437~444, 1996
- 19) 日本大学百年史編集委員会: 日本大学百年史 第二巻, 日本大学, 東京, p 191~209, 2000
- 20) 日本大学百年史編集委員会: 日本大学百年史 第四巻, 日本大学, 東京, p 159~172, p 206~208, p 251~260, p 693~706, 2004
- 21) 工藤逸郎: 東洋歯科医学専門学校の日本大学への合併とその後の展開—佐藤運雄の理念とその実践—, 日本大学紀要第 6 号, 東京, p 51~86, 1999
- 22) 工藤逸郎, 三宅正彦, 見崎徹, 金山利吉, 西山實, 若松佳子, 佐藤孜: 東洋歯科医学専門学校の日本大学への合併迄の経緯とその後の展開—主な関係者と関係書類を中心に—, 日本歯科医史学会々誌, 24(2), 145-156, 2001
- 23) 工藤逸郎, 三宅正彦, 見崎徹, 金山利吉, 西山實, 若松佳子, 小室歳信, 佐藤孜: 日本大学歯学部創設者佐藤運雄先生の医術・歯科医術開業免状並びに関係書類について, 日本歯科医史学会々誌, 25(1), 6~11, 2003
- 24) 佐藤運雄: 口腔外科学, 歯科月報社, 東京, 初版, 1932
- 25) 新国俊彦: 佐藤運雄先生とその著書について, 日本歯科医史学会々誌, 7(3), 49-60, 1979

著者への連絡先: 工藤逸郎

〒 272-0035 千葉県市川市新田 3-15-19
TEL 047-377-4710